

学校の新たな仕組づくり	
所属・職名・氏名	森町立森小学校 教諭 中村友子
受賞分野	学校運営

【通信票を2期制に】

本校は、「認め合い 高め合う 笑顔の森小」を学校経営目標とし、子供たち、職員、保護者・地域の方々の笑顔あふれる学校づくりを目指しています。教務主任として、子供たちや教職員の笑顔のために、学校の新たな仕組づくりに取り組みました。

まず、次年度から通信票を2期制にするために、既に実施している学校から情報を提供してもらい、2期制にすることのメリットとデメリットをまとめ、管理職に報告しました。また、職員には、通信票を2期制にすることで、学期末の慌ただしさがなく、じっくりと子供に向き合うことができたり、テストやノートといった評価対象が多くなることで、より多面的・多角的な評価をすることができたりするというメリットを伝えました。さらに、PTA 役員や学校運営協議会委員の方にも、通信票の2期制が子供の見取りに有効であることや教職員の働き方改革につながることを伝え、了承していただきました。

【学用品を直接注文に】

また、現金集金をしていた学用品の注文は、業者のホームページ等から保護者が注文する方法に切り替えました。これにより、学校で集金する手間がなくなり、現金の紛失といったトラブルを防ぐことができるようになりました。この取組は、町内の小学校にも情報発信し、他校でも業務改善につなげることができました。

【学び合いでスキルアップ】

さらに、本校では、金曜日の放課後に「OJT 研修」を実施しています。若手職員が不安に感じていることを解消したり、ICT など若手職員が得意とする分野に関してはベテラン職員が学んだりすることで、お互いのスキルアップにつなげることをねらいとしました。アンケートを取って内容を決めたり、研修で学んだことを他の職員に伝達できるよう、こちらから意図的に研修内容を依頼したりしました。ブックトークの実技や特別支援教育に係る情報伝達、Canva の体験等を行い、若手、ベテラン教職員が共に新たな知識を得ることができました。



OJT 研修の様子

【さらなる改善へ】

私たち教職員の業務負担を少しでも軽減し、授業の質が向上できるよう、ICT や外部人材の活用をさらに進めたり、先進的な取組をしている学校の情報を参考にしたりして、学校の新たな仕組づくりにこれからも取り組んでいきたいと思えます。

誰一人取り残さない音楽の授業を目指して

所属・職名・氏名	富士市立鷹岡中学校 教諭 立野 恵
受賞分野	学習指導

【音楽の授業を通して「生きる力」を育む】

技能教科は、集団の人間関係や生徒個人の資質（生徒指導面や発達の特徴によって配慮を必要とする場面）が出やすく、ともすれば生徒のこれまでの音楽（授業）経験から、消極的・反抗的なあらわれが見られます。そのような状況の中で私自身が特に大切だと考え、日々の授業で生徒に必ず伝えているのは、“音楽を学ぶのではなく、音楽を通して人として大切なことを学ぶ”ということです。週に1時間という限られた授業の中で、皆で同じ時間を共有しながら音楽の引き出しを増やす活動を充実させることが、

- (1) 多種多様な音楽に触れて、さまざまな価値観を受け入れる。
- (2) 音楽の歴史の中で大切にされてきたものを受け止め、継承していく。
- (3) 経験のないものに、仲間と一緒に挑戦することで新しい扉を開くことに興味関心を持ち、主体的に学んでいく楽しさを知る。

ことにつながると考え、授業実践を重ねてきました。

【具体的な授業実践】

本校では、学校教育目標「自ら学ぶ子」のもと、「子供理解」に基づく「居場所づくり・絆づくり・自己決定」をキーワードとして、学習指導と生徒指導の両面から、生徒の主体的な活動を促すための教師の適切な仕掛けについて研修しています。生徒の家庭環境や学習環境の差が大きいいため、子どもたちが自己肯定感や所属感、自己有用感を持てるように大人が関わっていくことを大切にしながら、深い学びを目指す授業づくりをしてきました。本校の音楽科教員は私1人のため、全校生徒と授業で関わることができます。その強みを生かし、学級担任と生徒の情報を交換しながら授業中の生徒のあらわれを観察し、個別に声を掛け、学習活動に全員が参加できるよう配慮しています。特活部とも連携し、学校行事や学年行事でも適切に合唱活動を取り入れ、「人のために歌う」「歌に想いを込める」ことを目指して意図的な選曲や練習計画を立て、取り組みました。また、器楽の活動の一環として、全校で三味線を扱っています。三味線は誰でも簡単に音を出せるだけでなく、自分の意志で音を変化させて演奏することができる楽器です。楽しみながら伝統文化に触れ、日常生活ではあまり経験のない緊張感や達成感を味わうことができるため、生徒からの評価も高い活動になっています。自然に聴き合い、教え合いができる点も教育効果が高いと考えられます。今後も授業を通して生徒一人一人と関わり、全員が参加できる授業にこだわりながら、子どもたちの社会性や人間性を養うことで「ウェルビーイング」の視点に立った教育を推進していきたいと思えます。



総合学科校として自由な科目選択を可能とする教務主任としての取組

所属・職名・氏名	静岡県立小笠高等学校 教諭 澤入 正通
受賞分野	学校運営

【はじめに】

静岡県立小笠高等学校は平成7年に県内で初めての総合学科を設置した高校で、令和7年度に創立113年を迎えた伝統校です。私は赴任5年目から教務主任となり、学校運営に携わってきました。

【総合学科の魅力】

本校は共通教科に加え、農業、工業、商業等の専門教科の科目、各教科の学校設定科目など県内屈指の科目数（約130科目）を準備し、生徒一人ひとりのニーズに対応した多様な学びや探究的な学習・課題解決型学習を実践しています。また、体系的な教育活動を実施するために、人文国際系列、自然科学系列、健康系列、芸術系列、農業科学系列、情報技術系列、ビジネス情報系列を設定しています。生徒の希望に沿った個別の時間割を作成できることが本校の魅力です。

【小笠高校の科目選択指導と今後の課題】

本校は、一人ひとりの個別の時間割を作成するために、少人数クラスで運営しています。しかし担任数が増えれば新しく赴任した教員も科目選択指導に携わらなければいけません。ほとんどの教員が普通科から異動してくるため、大きな不安を抱えています。私が赴任した頃は、2人担任制をとり、前年度から勤務している教員から学ぶことができましたが、教員数の減少からこの仕組みも継続できなくなりました。



1年次科目選択説明会の様子

そこで、現在では科目選択の取りまとめを行う教務課の部署と、担任を中心とした年次の職員が科目選択の打合せをして科目選択指導を進めています。また、初めて科目選択をする1年次生には教務課が全体指導を複数回実施することで担任の負担を減らしています。

科目選択では、生徒の進路希望と興味関心がある分野の把握が重要です。各教科主任には魅力的な授業を実践するために、人数枠の設定や系列ごとのモデルを作成してもらうことで、より主体的に運営に携わってもらっています。本校では教科、系列からも意見を吸い上げ、学校運営に生かしています。また、教育課程検討委員会や教科主任会を定期的に開催し、本校の教育課程について協議しています。

総合学科の授業を構成、継続するために教務課が中心的な役割を果たしています。近年では新教育課程への移行に伴う成績処理、生徒指導要録への対応だけでなく、IT環境の整備、1人1台端末の導入や遠隔授業の体制づくりと多くの課題への対応が求められています。そのためには、多くの先生方の力を結集して、実施していくことが求められています。職場の協働体制が継続される組織を目指し、今後も多くの先生方との連携を深めていきます。

互いを知り合い、互いを認め合い、双方が成長する学校間交流

所属・職名・氏名	静岡県立西部特別支援学校 教諭 田原 有佳里
受賞分野	特別支援

【はじめに】

前任校の浜北特別支援学校では、学校間交流の担当者として、「共生社会の担い手となる児童生徒を育てるために、小、中、高の12年間を通した効果的な交流及び共同学習の在り方について検証する」ことを目的に、標題のテーマの下、小・中・高等部それぞれに段階的な交流テーマと活動設定をし、2年間の研究と実践に取り組みました。

	キーワード	テーマ	主な活動
小学部	知る	交流校の友達とペアになり、新しい友達を作る	校内スタンプラリー 手紙・作品の交換
中学部	分かる	地域を知り、地域に住む仲間と互いの学びを発表し合う	防災マップ・作業製品の展示 音楽交流（音楽発表、合同合唱）
高等部	認め合う	互いを認め、つながりを感じて応援し合う	作業製品の展示・販売 美術部との合同作品制作

【成果① 特別支援学校の児童生徒が主体的に取り組む交流の場が実現】

事前学習の充実、計画段階からの生徒の参画、児童生徒の強みや活躍の場を取り入れた活動設定などにより、特別支援学校の児童生徒が「何かをしてもらう」交流ではなく「互いを理解する」交流が実現できました。

【成果② 効果的な交流方法を組み合わせ、年間通して継続的に交流】

直接交流で一緒に活動することで得られる喜びや達成感を軸に、その場限りの交流にならないよう、間接交流を組み合わせ年間を通して交流しました。児童生徒のメッセージには、相手を「知り」、互いの頑張りが「分かり」、地域の仲間として「認め合う」というテーマにせまる言葉がありました。

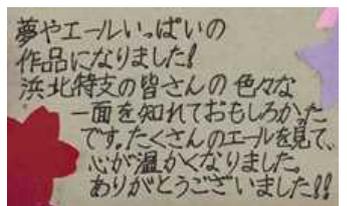
【学校間交流を効果的なものにするために】

今後、学校間交流で大切にしていきたいことが二つあります。一つは、成果を引継ぎながら、双方の学校が負担のない交流方法に発展させていくことです。そのためには、他の学習との関連を深めて年間指導計画に位置付けることが大切だと考えます。もう一つは、交流に関わる全ての教師が、活動を通して、児童生徒のどんな姿を引き出し、何をどのように学ぶのかを理解しておくことです。

こうした学校間交流の取組は、特別支援学校の児童生徒だけでなく、交流相手校の生徒にとっても多様性を受け入れ、共に生きる力を育むものであります。勤務校が変わり、現在は教務課長を務めていますが、教育課程の編成やカリキュラムマネジメントにおいて地域や社会とのつながりを大切に、共生社会の実現に向けて尽力していきたいと思っております。



特別支援学校児童の手紙



交流校からのメッセージ